特集 自然とふれあう体験活動

地震や台風による自然災害への意識が日増しに高まっています。怖がらず、しっかり「自然」と向き合い、知ることが大切。北区内の小中学校では、学校生活の中で自然とふれあう活動が たくさんあります。
自ら「種を植え」、「育て」、「収穫して」、「食べる」体験から学ぶことは？ 地域ボランティアさんとの関係は？
北区スクールコーディネーター広報委員会は、今回赤羽地区、滝野川地区、王子地区の３エリアの小学校の活動を取材しました。

赤羽地区

2019.9.25 Wed【稲刈り】──5年生
桐ヶ丘郷小学校

赤羽自然観察公園。東門から入ってすぐ右手に広がる稲田で、稲刈りが行われた。稲作体験の授業として、子どもたちは一年を通じて、[代かき]⇒[田植え]⇒[稲刈り]⇒[脱穀]⇒[精米]のプロセスを学ぶ。5月に5本ずつ植えた苗が分蘖して、20～30本に増え、花を咲かせ、お米を実らせた。子どもたちはこれを自ら収穫する。

いなほの会代表の浦野さんから、当日の流れと稲の刈り方が説明された。児童が“刈った”稲穂をブルーシートまで“運び”、保護者やボランティアさんが“結ぶ”。

稲穂をしっかり握り、泥がつかない高さの根元に刃を入れ、手前に引くように刈る。大人たちは一人一人に付き添い、丁寧に指導する。それを2～3株ずつ束ね、十字にして縛る。学校に運んで天日干し。

そして3週間後、脱穀作業へ進む。

ぬかるみに足を取られないよう、稲株（稲の切り跡）の上を踏むとよい。

水につけて柔らかくした昨年の藁で縛る。児童も積極的に参加した。

「1株にお米が何粒あるか、数えてみて。元気な稲は100～120粒くらいかな。今年はもっと少ないかもしれない」と浦野さん。この夏は近年稀に見るほど日照時間が少なかった。稲に残る青さにその影響が見られたという。例年およそ20キロ程度の収穫量で、脱穀、精米すると16～17キロくらいになるそうだが、今年はどうか。

桐ヶ丘郷小では、保護者が子どもたちとおにぎりパーティを行う予定。赤羽台西小は未定だが、昨年度は小分けして“七福米”というパッケージで販売した。

稲の花。気温30度になると花が開く。

刃物と違って、刃がギザギザ。稲が滑らないようになっている。稲刈鎌は普通の

「区民田んぼ」で作られたカカシ

リヤカーに積んで学校まで運ぶ。（赤西小）
今年のお米は、山形県産の「はえぬき」。

～児童へのアンケート～

■勉強になったこと

- 稲刈りのやり方やカニやザリガニが田んぼにあまりよくない生物だということなど。（桐郷小）
- 稲は半年かけて、やっとできる。（桐郷小）
- 雨や晴れ、気温が合わさってちょうどじゃないとダメということ。（桐郷小）
- 害虫がいたり、台風が来たり稲を作るのは簡単ではないということ。（桐郷小）
- たくさん人がいないと大変なこと。（赤西小）
- お米を作るには時間がかかること。お米にはいろいろな種類があること。（赤西小）
- 稲刈りは予想以上に硬かったです。コツは、刃を上下に動かしながら切るのがコツで、すらすら切れました。（赤西小）
- 米を育てるのはこんなに大変なんだ。（赤西小）

■感想を自由に

- これからはお米は1粒も残さず食べたい。（桐郷小）
- 私が1番心に残ったのは、代かきです。最初は、感触が気持ち悪そうだったのですが、入ってみるとクッションみたいに気持ち良かったです。（桐郷小）
- 田植えする時、稲刈りする時は必ずどこかに泥がつくこと、それが私はあったかくて気持ちよかったです。（桐郷小）
- 岩手に戻り、ひぃおじいちゃんひぃおばあちゃんの手伝いをしたいです。（桐郷小）
- 稲を刈る時間が短く感じたけど、結構長かったことに驚いた。（赤西小）
- これから米を食べるときは「いただきます」「ごちそうさま」をしっかり言って食べたいです。（赤西小）
- 虫がたくさんいてびっくりしました。それほど美味しいのかなと思いました。はやく食べてみたいです。（赤西小）
- 最初は泥がつくし、虫もいっぱいいるし、とてもやだな～と思っていました。でも、やってみたら汚れても夢中になってできたしいろんなことを知れました。（赤西小）

2019.9.27 Fri【稲刈り】──5年生
赤羽台西小学校

滝野川地区

2019.10.11 Fri【滝野川ゴボウ】──3･4年生
谷端小学校

谷端小では“江戸東京野菜を育てよう”というテーマで、学年別に地域の伝統野菜を育てる取組がある。**しんとり菜**、**金町小かぶ**、**大蔵大根**などのうち、3・4年生が栽培の難しい**滝野川ゴボウ**に挑む。

今年度は諸事情があって、栽培場所を移動したため、残念ながら収穫には至らなかった。担当の先生方に、昨年度の内容を含めてお話を伺った。

春過ぎに種を蒔き、11月下旬の収穫という長期間。とにかく育てるのが難しい野菜。地中深くまで伸びるので、水を行き渡らせるには、子どもたちの朝の水やりでは全く足りない。設置されたスプリンクラーで朝夕1時間程度、自動的に水を与え続けるほど大量の水が必要なのだ。

3年生は、4年生に教えてもらって、とりあえず植えてみる。その経験を生かして4年生で再挑戦。水や日光の必要性など、気付いた点は次の3年生に伝える。そうやって連続性のある授業を試みた。

収穫できる喜びはとても大きいようで、いつもは土で汚れるのを嫌っている女の子でさえ、泥だらけで夢中になっている。ゴボウが折れないようにスコップは使わず、手で丁寧に掘り起こす。そんな児童の一生懸命な姿を見て、胸をなでおろす。

収穫後、1本ずつ持ち帰るほど量はないので、給食に混ぜて、ゴボウのブラウニー、ゴボウサラダを全校生徒でいただいた。ゴボウが嫌いな児童も残さず食べていた。

4年生では、総合の授業で、江戸東京野菜についてパソコンで調べるなど、自分たちの住む土地や歴史に関心をもたせたり、社会科の授業で、東京野菜の生産量とリンクさせたりして、この活動と様々な情報との「つながり」を意識させた。

この活動は日本農林社さんのご好意から、毎年新しい土と種をご提供いただき、大槻さんの日々の指導もあり、長年継続できている。虫が付いたら来てもらって薬を散布していただくなど、手厚いサポートがあってこそ。地域との深い関わりで成り立っている。

万が一それが途切れてしまった場合、再開するためのノウハウや資材はどうするか、またどんな意義をもって始めるか。教職員は異動があるため、文書化されていても難しく、そういった意味でも、地域の方々に継続してご協力いただけることの重要性を強く実感している。

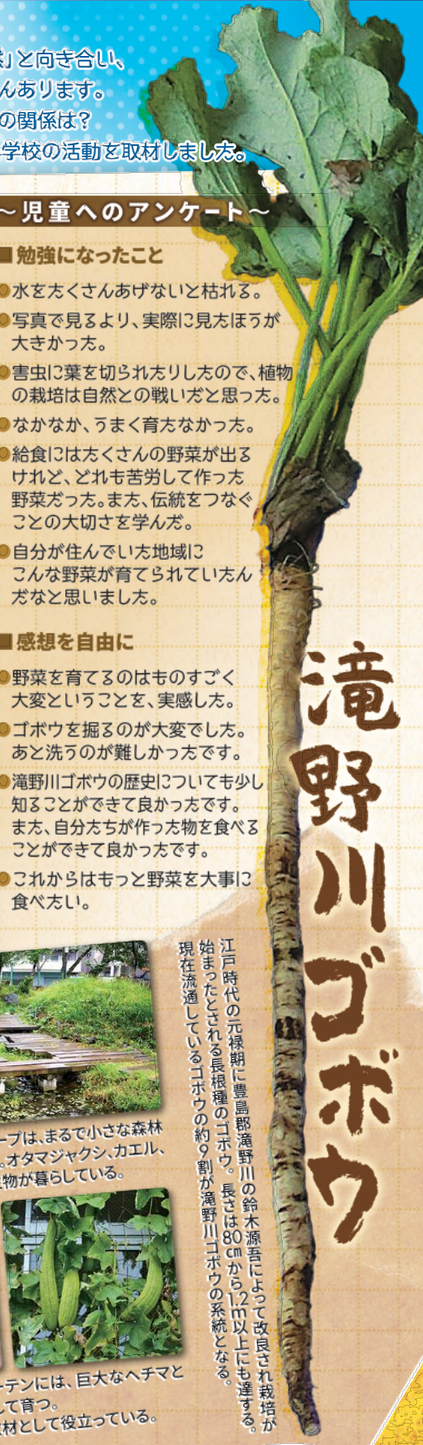
～児童へのアンケート～

■勉強になったこと

- 水をたくさんあげないと枯れる。
- 写真で見るより、実際に見たほうが大きかった。
- 害虫に葉を切られたりしたので、植物の栽培は自然との戦いだと思った。
- なかなか、うまく育たなかった。
- 給食にはたくさんの野菜が出るけれど、どれも苦労して作った野菜だった。また、伝統をつなぐことの大切さを学んだ。
- 自分が住んでいた地域にこんな野菜が育てられていたんだなと思いました。

■感想を自由に

- 野菜を育てるのはものすごく大変ということを、実感した。
- ゴボウを掘るのが大変でした。あと洗うのが難しかったです。
- 滝野川ゴボウの歴史についても少し知ることができて良かったです。また、自分たちが作った物を食べることができて良かったです。
- これからはもっと野菜を大事に食べたい。



滝野川ゴボウ

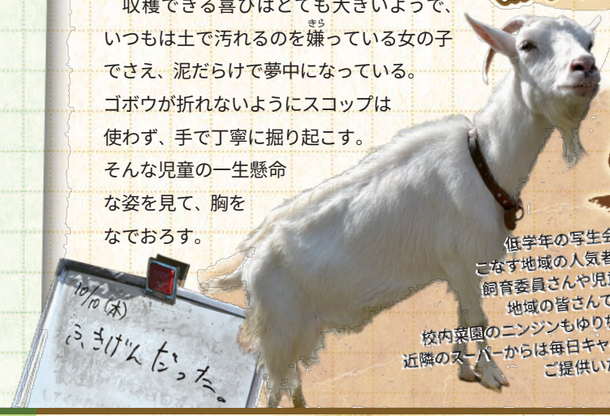
江戸時代の元禄期に豊島郡滝野川の鈴木源吾によって改良され栽培が始まったとされる長根種のゴボウ。長さは80㎝から1.2ｍ以上にも達する。現在流通しているゴボウの約9割が滝野川ゴボウの系統となる。

谷端小にあふれる自然

校庭の一角に広がるビオトープは、まるで小さな森林公園。児童は自由に遊べる。オタマジャクシ、カエル、セミ、ヤゴ、トンボ…様々な生物が暮らしている。

校舎を覆い隠す緑のカーテンには、巨大なヘチマとゴーヤ、きゅうりが混在して育つ。
校内の“自然”は全て教材として役立っている。

カリ



低学年の写生会のモデルもこなす地域の人気者ゆりちゃん。飼育委員さんや児童（希望者）、地域の皆さんでお世話する。
校内菜園のニンジンもゆりちゃんのため。近隣のスーパーからは毎日キャベツの外葉をご提供いただいている。

自然とふれあう北区の活動紹介

八幡小学校

毎年2月に若いお相撲さん二人をお呼びしてお相撲の会をしています。今回はこちらから児童、保護者、校長先生、引率の先生で湊部屋へ行き朝稽古を見学しました。

岩淵小学校

双眼鏡を覗き込んで、荒川に生息する野鳥探し。自然豊かな荒川には、渡り鳥がやって来ます。夏と冬では見られる鳥の種類が違うとの事…冬にはどんな鳥と出会えるのかな？

赤羽岩淵中学校

伐採することになった校庭の桜の木を、花いっぱいボランティアが参加して挿し木にチャレンジ。枝を短く切り、葉をカットして水揚げ。それからポットに植え付けました。

田端中学校

地元在住のプロに教わる楽しい22講座をサブファミリー事業のオープンスクールとして行います。生徒と地域の方が一緒に楽しく学べるようにサポートしています。

田端小学校

田端小では茶の心を学ぶということで、太田淑江先生のご指導のもと6年生の2月に茶道体験を実施しています。体験が終わると心も整うのか、児童たちの顔が穏やかに見えます。

滝野川第四小学校

毎週火曜日10時から、保護者3名＋卒業生4名の計7名で、図書室前掲示板の飾り付けや図書整理をしています。みんなで意見を出し合いながら楽しく活動しています。

ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

令和元年度 広報委員会